

『思はぬ方にとまりする少将』 ところどころ

後藤, 康文
宮崎大学助教授

<https://doi.org/10.15017/9445>

出版情報 : 語文研究. 75, pp. 51-59, 1993-06-06. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

『思はぬ方にとまりする少将』とところどころ

後 藤 康 文

はじめに

『堤中納言物語』は、『源氏物語』よりのちの物語作品としてはまさに異例といえるほど、多数の注釈書に恵まれている。しかしながら、その本格的な注釈の歴史はきわめて浅く昭和期を遡らないものであるし、なによりも、この短篇物語集の伝存状況自体が決して芳しいとはいえないことが災いして、各篇の注釈には、いまだ不審な点が少なからず残されているのである。そこで、本稿では、同物語所収の一篇『思はぬ方にとまりする少将』を祖上にのせ、従来の注釈では不正確ないし不十分であると考えられるいくつかの箇所について、本文の整理あるいは解釈に関する試案をそれぞれ提示してみたいと思う。

一

語り手の前口上のもと、物語は次のように語りはじめられる。

大納言の姫君ふたりものし給ひし、まことに物語に書きつけたるありさまに考るまじく、何ごとにつけても、生ひ出で給ひしに、こ大納言も母上も、うちつづき隠れ給ひにしかば、いと心細きふるさとながめ過ごし給ひしかど、はかばかしく御乳母だつ人もなし。

(一一七頁六行―一一八頁五行)
まずは、ヒロインとなる姉妹の紹介が行われるわけであるが、ここで問題となるのは、傍線を付した「こ」一字の存在である。「こ大納言」が亡くなったという叙述そのものは別段奇異とするには当たらないけれども、この場合ははじめに「大納言」の姫君がふたりいらっしやうと記されていて、その間に齟齬が生じてしまうように思われるのである。

これについては、ひとまずふたとおりの解決案が考えられよう。すなわち、「こ大納言」の「こ」を無用な文字と判断して本文から抹消してしまうか、逆に、最初の「大納言」の頭に「こ」を補うか、である。ちなみに、山岸徳平氏の『全註解』は前者の立場から、焦点の「こ」の字の由来に関して、直前の「給ひしに」の「に(七)」の左右が分かれた結果、左半分が「に(六)」右半分が「こ(七)」

としてそれぞれ独立し、さらに、その「こ」に「古」あるいは「故」が当てられるようになったものと推測しているが、これはあまりに強引な想定であり、かりにその線で説明を試みるのであれば、むしろ「(一)」「(二)」の衍字を考える方がまだしも穏やかな推定ではなかつたかと感じられる。

さて、以上のような処理の方法も一応考慮の余地があるとは思ふけれども、ここでは、別に一案を示すことにする。それは、「こ(古)」はもと「ち」(知)からの転化であると想定する考え方であり、「古」の草体が「ち」二文字に見誤られる可能性は十分ありうるものと思われる。そうであるならば、「ち」はむしろ「父」の意であるから、本文は「父大納言も母上も、うちつづき隠れ給ひにしかば」と整理されることになり、先の不審が解消されるばかりか、直後の「母上」との対応からも大変望ましい形となるのである。『源氏物語』桐壺卷の「父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて」(1)―(194頁)などが、さしあたり参考となるうし、またたとえば、『兵部卿物語』にはまったく同じ内容の事柄が、「昔ち、大納言殿の領じ給ひし所」(5)―(135頁)とも、「昔こ大納言殿の領じ給ひし所」(5)―(138頁)とも記された例が見られる。

二

「両親を亡くして零落し、もの淋しく心細い日々を送る姫君たちであったが、やがて右大将の少将が大君に熱心に求婚してくるようになった。しかし、彼女には今や結婚など思いも奇らぬこととて、

いっこう取りあわないうところ、ある日、しびれを切らせた少将を、

少納言の君とて、いといたう色めきたる若き人、何のたよりもなく、ふたところ御殿ごもりたるところへ、導き聞えてけり。

(一一九頁五行)八行

という事態が発生する。この部分で不審を覚えざるをえないのは、傍線部「たより」という語なのである。従来の注釈書はこの語の使用になんら疑いをもたず、これを含む「何のたよりもなく」について、たとえば「何の音沙汰もなく」(『評釈』『詳解』)、「何のついでもなく」(『大系』)、「少将がたずねて来る事に関して、姫君に対しては、何の案内もなく、突然に」(『全註解』)、「何の前ぶれもなく。裏に、少将とだけは十分に手はずを相談したことをにおわす」(『全集』)などと解いているのだが、これらはいずれも誤りである。正攻法ではいっこうに埒のあかない女に対して、男が侵入という強行策に打って出ようとする時、そもそも「音沙汰」も「ついで」も「案内」も「前ぶれ」も、あろうはずがないではないか。

結論を述べると、この「たよ(与)り」は、明らかに「たと(止)り」の誤写と見なければならぬ。「たとり」は「たどり」で、思慮、配慮、詮策、躊躇などの意を表す名詞。問題の本文は「何のたどりもなく」と整理されるべきで、少納言の君というたいそうちやらちやらした若い女房が「何の分別もなく」少将を手引きした、と解するのが正しい読みなのである。参考までに挙げるならば、「よし見給へ。何のたどりに現はれて、恨み聞えむ」(『有明の別れ』巻一・(1)―(133頁))、「何のたどりにもなく、なびく気色なれば」(同・(1)―(134頁))、「何のたどりにもなく、近づき寄せ給へる」(『我身にた

どる姫君』巻四・(3)―四〇頁)などの用例を指摘することができる。なお、土岐武治氏の分類する第三門諸本(季花亭文庫本等)本文においては、問題の箇所が「たより」ではなく「たとり」となっていること(『注釈的研究』)も付言しておくべきであろう。

三

念願を叶えた右大将の少将は、故大納言の大君のことが、

おしはかり給にしも過ぎて、あはれにおぼさるれば、うち忍びつつ通ひ給ふ。(一一二〇頁四行―六行)

のであったが、右傍線部「給にしも」はいかにも不審な本文である。この箇所に関する諸注の見解は、A||「タマフニシモ」と解する立場(『評釈』『新註』『全書』『詳解』『大系』『全註解』『全釈』『注釈的研究』『集成』)、B||「タマヒニシモ」と解する立場(『全集』『対照』『全訳注』『完訳』『新大系』)のふたつに分かれているわけであるが、残念ながら、そのいずれにもしたがうことはできない。まずは、Bの考え方であるが、これはまったくの論外で、たとえば「し」
「も」の助詞によって、姉君の愛らしさが、少将の想像を遙かに超えていたことがわかる(『新大系』)といった解説も見られるが、この「タマヒニシモ」に明快な文法的説明を加えること自体、所詮不可能な話ではないのだろうか。これに対してAであれば、一見問題なく意味は通じそうに見えるけれども、副助詞「しも」の用法にはやはり大きな疑問が残るのであり、むしろ「タマフニモ」とありたところである。

私見によれば、ここは「に」と「し」の間で転写の過程における

転倒が起こったと判断するのが妥当かと思われる。すなわち、「給にしも」は「給しにも」の転化だということであり、「し」は助詞ではなく、いわゆる過去の助動詞「き」の連体形であるということにほかならない。したがって、このあたりの本文は「おしはかり給ひしにも過ぎて」と整理されなければならないのである。今、参考例の一端を掲げておくと、「聞しめししにもこよなき近まさを、はじめよりさる御心なからんにてだにも、御覧じ過ぐすまじきを」(『源氏物語』真木柱巻・(3)―三七九頁)、「教へ奉りしにも過ぎて、あはれなりつる御琴の音かな」(『夜の寝覚』巻一・四八頁)、「春宮は、女御の御ありさまを、聞き給ひしにもやや立ちまさりて、まだしきに、すまもなくもてなし聞え給ふ」(『若の衣』・(3)―一三三頁)、「何ごとも、かねて思ひしにいみじうまさり給へれば、御心ざしなめならず」(『恋路ゆかしき大将』巻一・(3)―二四三頁)、「聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ」(『徒然草』五十二段・七一頁)などがある。これだけの裏づけがあればもはや十分ではなからうか。

四

もうひとりの少将||右大臣の少将は、大君が大秦に参籠する間隙をついて、首尾よく中君のもとへ侵入するのであるが、その様子は、次のように述べられる。

何のつつましき御さまなれば、ゆゑもなく入り給ひにけり。(一一二八頁二行―三行)

本文整定上の問題点は二箇所あるが、はじめに前半部について考えてみたい。この部分に対する諸注の見解は、A||本文を「何のつ

つましき御さまなれば」とするもの(『評釈』『新註』『全書』『詳解』『大系』『注釈的研究』)、B||本文を「何の。つましき御さまなれば」と区切るもの(『全註解』『集成』)、C||本文は「何のつましき御さまなれば」のままで、「何のつましきことなき御さまなれば」と同意と考えるもの(『全釈』『全集』『対照』『完訳』『新大系』)と、およそ三つに分かれているけれども、いずれも疑わしい。近年の理解はC説に傾いているようにも思えるが、「ことなき」の省略とはかなり苦しい想定である。たとえば『全釈』は、「何の」という詞が自然下に否定を含む「ことなき」を予想させるので、当時こうした省略を行ったのではなからうか」と説明するのだが、はたしていかがなものか。また、一部伝本に拠るA説も、文章として不自然。「何の」が呼応する打ち消しの表現には、大別して「くガナイ」型と「くデナイ」型とがあるが、「さまガナイ」というのでは、この文脈に明らかにそぐわない。残るはB説であるが、これに到っては、もはやコメントの必要すらないであろう。

そこで思うに、この場合の「何の」は、上に述べた「くデナイ」型の打ち消し表現に呼応するものと判断されるべきなのである。つまり、傍線部「なれば」は「ならねば」の写し誤りだということだ。「ね(祢)」と「れ(礼)」との誤写は十分に考えられるし、転写過程での「ら(良)」字の消失(見落し)もよくおこる現象である。したがって、この前半部本文は「何のつましき御さまならねば」と整理されるのが適當といえ、「格別憚られる(お邸の)御様子ではないので」と解釈されるべきなのである。参考「何の石木の身ならねば」(『蜻蛉日記』上巻・六〇頁)、「なほかしこに渡し奉りてむ。何のところせきほどにもあらず」(『源氏物語』若紫巻・(1)―三三二

頁)、「右近は、何の人数ならねど、(中略)古人の數に仕うまつり馴れたり」(同玉鬘巻・(3)―八一頁)、「われは、何のたのもしげある身の際にてもあらず」(『夜の寝覚』巻三・二二八頁)、「何の思ひ出でならねど」(『有明の別れ』巻一・(1)―三五四頁)、「何ばかりのいさみならねど」(『若清水物語』上巻・(2)―一五〇頁)、「何ばかりの身にあらぬを」(『八重葎』・(5)―三九六頁)など。

次いで、後半部に移るが、ここで問題となるのは「ゆゑもなく」という表現である。諸注を参観すると、それぞれの底本に忠誠を尽くして、「故もなく」||「特別な支障もなく」(『全集』『完訳』)、「わけもなく」(『全註解』『対照』『全訳注』『集成』)などと解する趨勢にあるようだが、とても首肯しがたい。そもそも「ゆゑ」という語の語義は「わけ・理由」なのであるから、かりにこの形の本文に正しい訳を与えるとすれば、「何のいわれもなく」(『全釈』)とでもなるはずであって、「造作なく・簡単に」の意を表す「わけもなく」とは根本的に「わけ」が違うのである。では、「何のいわれもなく」といった解釈がこの場合正解かという点、もちろん否である。男が見ず知らずの女の許へ不意に忍び込むのに、正当な理由も何も土台あろうはずがないのだから。

ここはやはり、「神宮本・元禄本など」ゆくりなくとする。字形からみて、「くり」が「えも」と誤写される可能性は多いから、その方がよいかも知れない(『全釈』との推定が正鵠を得ている―ただし、誤写については「くり(久利)」↓「へも(部毛)」を想定すべきであろう―)であって、『評釈』『新註』等早期の注釈書にあるとおり、本文は文句なく「ゆくりなく」と定められねばならないところなのである。意味はいうまでもなく「不意に・突然・だしぬけ

に」。

五

これも、いとおろかならず思さるれど、按察使の大納言聞き給はむところを、父殿、いと急に諫め給へば、いまひと方よりは、いと待ち遠に見え給ふ。(一一九頁三行〜七行)

と、右大臣の少将と中君との逢瀬まなぬその後の状況が語られたあと、問題の摩訶不思議な系譜紹介が行われる。

この右大臣殿の少将は、右大臣の北の方の御せうとにもものし給へば、少将たちも、いと親しくおはする。(一一九頁七行〜一三〇頁二行)

諸注説明に窮している箇所、その苦心のほどは、この本文前半を「この右大臣殿の少将は、右大臣の、北の方の御せうとにもものし給へば」と読み、右大臣の少将は、右大臣が、右大将の北の方の御兄弟だったので、の意ととる近年のむりな解釈によく表われているといえるだろう(『全集』『全訳注』『集成』『完訳』『新大系』)。結局のところ、この部分はそのままでは明らかに解釈不能なのであり、どうしても伝来の過程において生じた混乱が存在すると判定せざるをえないのである。

その謎解き―本文復原に際して重要な鍵を握っているのは、実は「少将たちも」という表現なのであって、この文脈における係助詞「も」の機能には十分留意する必要がある。すなわち、この「も」は、「少将たち」が大変に昵懇の仲であることの原因たるべき別の人物同士の間関係が、上においてすでに述べられていることを当然

のごとく前提としているのである。そして今かりに、問題の本文を、A「この右大臣殿の少将は、右大臣の北の方の御せうとにもものし給へば」と、B「少将たちも、いと親しくおはする」とに区切ってみるならば、A部分とB部分との連係の論理は、AⅡ「親同士が親しい間柄である」・BⅡ「その子供同士も親しい間柄である」と考えられるはずであるから、A部分の記述内容は、ふたりの少将の「親同士が親しい間柄である」ことの具体的説明でなければなるまい。

上記の見地から、ここでは思い切った本文整定案を提出しておくこととするが、まず第一に指摘できる点は、「右大臣殿の少将は」の傍線部「の少将」は後人のさかしらな補入であって、断じて本来的なものではないということである。なぜなら、親同士の関係を述べる部分にいきなりその息子が登場することはありえないし、万一そうであるならば、「右大臣の少将」とあるべきで、「殿」は不要な表現のはずなのだから。ゆえに、ここはもと「この右大臣殿は」であったと想定される。なお、「の少将」の補入は、「この」という語の指示対象が「父殿」ではなくその子の「少将」であると短絡的に誤認されたことに、おそらくは起因しているよう。そして、つづく「右大臣の北の方」については、当然「右大将の北の方」の誤りであると判断しなければならぬ。

以上をあらためてまとめると、本文は「この右大臣殿は、右大将の北の方の御せうとにもものし給へば、少将たちも、いと親しくおはする」となり、ここで述べられているのは要するに、「少将ノ忍ビ歩キヲ諫メナサツタ」この右大臣殿は、右大将の北の方の御兄弟でいらしたので、(従兄弟同士ノ間柄ナル両家ノ御息)少将たちも、たいそう親しいおつきあいをしておられた」という事柄だ

と理解することができるのである。こうしてみると、この系譜紹介の混乱は、「作者の錯誤」(『全集』)に因るものでも、また、「この物語の展開を面白くさせる大切な系図上の作為」(『新大系』)でもないこと明白だといわざるをえないだろう。

六

運命のいたずらで大君の方とも逢うこととなった右大臣の少将権少将は、この偶然の出来事をうれしく思い、「いと馴れ顔に」女をかき口説くのであった。その様子は、

かねてしも思ひあへたらむことめきて、さまざま聞え給ふこと
もあるべし。(一三九頁 二行〜四行)

と語られるが、ここで念のために確認しておきたいのは、傍線を付した「思ひあふ」という動詞の、この文脈における意味なのである。というのも、諸注を参照するに、この語は、「懸想してたくらむ」(『評釈』)、「計画する」(『大系』『全集』『集成』)、「思いこらえる」(『全註解』)、「敢えて思う」(『全釈』)、「おもいをしとげる」(『対照』)、「計画したとおりに思いがかなう」(『全訳注』)、「考え合わせる」(『新註』『新大系』)などと、さまざまに解されていて一定しないからである。

私見を示せば、まず、下二段活用の補助動詞「あふ(敢ふ)」は「十分に〜できる」ほどの意に考ええると当たるから、「思ひあふ」の場合には、上接する動詞「思ふ」の担う意味によってその語義は決定されると見てよい。そして、「思ふ」には「予想する・予期する」の意があるので、ここは「十分に予期できる」くらいに解釈してお

くのが適當ではないかと思われる。つまり、権少将は、大君ともいつしか契りを結ぶ日の来ることを、ふたりはこうなる運命であったことを、前々から十分に予期できていたかのごとくに振る舞った、というのである。従来の見解の中では、「計画する」という訳語、あるいは、「予想しない人違いにも、当初からの意図であったと説明する」(『集成』)といった説明が一見近いが、これでは作為性が強く出すざるうらみがあろう。

ところで、この「思ひあふ」という動詞は、実際には「思ひあへず」等の否定形で用いられることが圧倒的に多いのであるが、たとえば、「大饗の儀式など、思ひあへたらんよりもかぎりなくぞ尽くさせ給ふ」(『有明の別れ』巻一・(1)―三六〇頁)、「夕立ちの暗れゆく空の雲間より思ひあへける夜半の月影」(寂蓮・『寂蓮法師集』二三四)、「正治初度百首」一六三四、「冬の来てかならず今日の初時雨思ひあへける神無月かな」(藤原為繼・『宝治百首』二〇二五)などの肯定形の用例も認められ、これらはみな、先に述べた語義の範疇に入れることのできるものばかりである。最後に、『源氏物語』胡蝶巻の「鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜はる。かねてしも取りあへたるやうなり」(3)―一六五頁)という一節も参考までに挙げておこう。

七

それぞれの朝、ふたりの少将はともに互いの名を騙って姫君たちの許へ後朝の歌を贈るのであったが、そのうち権少将が大君に手紙を届ける場面は、次のように描かれている。

いまひと方にも、「少将殿より」とであれば、侍従の君、胸つぶれて見せ奉れば、

浅からぬ契りなればぞ涙川同じなかれに袖濡らすらん
とあるを、いづ方にも、おろかにおほせられん」とにや。

(一四六頁二行―一四七頁一行)

はじめに取りあげたいのは、「とあるを」の傍線部「を」であるが、この助詞はいかにも落ち着きが悪い。ゆえに、これを説明して「とあるよの意。此の物語は、これで終ったのである」(『全註解』)とする極端な見解まであったのだが、ここは、「も(毛・茂) ↓」を(遠・越)の誤写を想定するのが妥当であろう。そして、その「も」は文末の「とにや(あらむ)」と呼応して、「トアルノモ、トツイウツモリナノダロウカ」の文脈を形成する関係にあると判断され、たとえば、「今は、いかにもいかにもかけて言はざらなむ、ただにこそ見ぬ、とおぼさるるは、人には言はせじ、われひとり恨み聞えん」とにやあらむ(『源氏物語』宿木巻・(5)―三九四頁)などと同型の構文と考えられるのである。

次に、「おほせられん」であるが、こども釈然としない。本文をそのままに「仰せられん」とするのが通説のようであるけれども、これによると、「おろかに仰せられん」は「いいかげんにおつしやらう」(『新註』)の意にしか解せないはずであるから、物語の前後の流れに照らして見る時、やはり不審とせざるをえない。ふたりの少将は、どちらの姫君に対しても並々ならぬ愛情を抱いて煩悶しているのだ。そうした状況の中で、恋する相手に「いいかげんにおつしやらう」ことは、まず考えがたいのである。本文を「仰せられず」と改め、「よい加減な(通り一遍の有りふれた)言葉におっしゃること

が出来ない」と解釈する説(『全註解』)、あるいは、本文を「仰せられじ」に改め、「おろかならず思うとおっしゃるつもり」と訳す立場(『全訳注』)が生れるゆえんである。

問題点はふたつあるように思われる。その第一は、「いづ方にもおろかにおほせられん」という表現全体は意味上、やはり打ち消さないし反語でなければならぬということである。具体的本文復原案としては、①「いづ方にも」の「も(毛)」は「か(可)」の誤写である、②「いづ方にも」と「おろかに」との間に、もともと「いかでか」等反語表現を形成する言葉が存在した、③「おほせられん」の「ん」は「じ」の誤りである、などの可能性を一応想定してみることでしようか。②案にも心惹かれるが、今は、『全訳注』に同じく③の考え方を採っておくことにしたい。「し(之)」が「ん(无)」に誤られることは、一般的可能性からするとやや考えにくいかとも思われるが、その一例を紹介するならば、『とりかへばや物語』巻三で、失踪した女大將を男尚侍が本来の男姿に戻って捜索しにゆく決意を述べる場面に、「女房などにも四五人よりほかは見え侍らねば、ありなしのけじめ知り侍らじかし」(三三二頁)という箇所がある。この傍線部分が、陽明文庫本・伊達家旧蔵本等では「ん」、宮内庁書陵部本・国立国会図書館本等では「し」となっていて、後者が文脈上妥当な本文といえるのである。この異同は、字体相似による単純な誤写というよりも、むしろ誤った文脈理解に原因があるろうか。

第二は、「おほせられ」は「おほされ」からの転化ではないかというところ。つまり、「仰せられ」ではなく「おほされ」が正しいと推測されるのである。なぜかといえば、「おろかに」を受ける言葉として、「今宵もおろかに言はましかば、逃げなましを」(『うつは物語』

俊蔭卷・一一九頁)、「さもこそ、おろかに申したりつるに」(『夜の寝覚』巻五・三三七頁)などのごとく、いわば〈イフ〉系の語が用いられるのは例外的なのであって、通常これに接続するのは、「例ならずおりたち歩き給ふは、おろかにおぼされぬなるべし」(『源氏物語』夕顔卷・(1)―二二五頁)、「たぐひなき御ありさまを、おろかによもおぼさじ」(同行幸卷・(3)―三二三頁)、「おろかにおぼされぬこと、と見奉れば」(同総角卷・(5)―二二四頁)などのごとく、いわば〈オモフ〉系の語だからである。さらに、この文脈にあっては、「仰せられ」よりも「おぼされ」の方がよほどふさわしい語ではないかという判断もある。「さ(左)」と「せ(世)」との誤写は認められてよいし、また、「さ」が「れ(礼)」の縦棒に連綿する部分が「ら(良)」一字に読まれる可能性も十分にあると思う。

さて、以上を総合すると、「浅からぬ」歌のあとの本文全体は、「とあるも、いづ方にも、おろかにおぼされじとにや」と整理されることになる。そして、「浅からぬ」歌の解釈、「にも」のニュアンス、「おぼされ」を一語とみるべきか否か、あるいはその主語を誰とするのか、さらに、「じ」は推量なのか意志なのか等々、さまざま必要な要素が複合して厄介だが、これにしばらく試解を付しておくなら、「とあるのも、どちらの姫君とも、御愛情浅くお思いにはならねないだろう、というつもりなのであろうか」とでもなるうか。

おわりに

強い疑問を感じつつも、取りあげたことをさし控えた箇所も少ないが、それらは懸案にして、いまはひとまず筆を擱きたい。古

典の本文を注釈する際には極力その原文を尊重すべきであって、みだりに、あるいは、安直な思いつきによって、都合よく本文の改変を行うことは厳に慎まねばならない。それはもちろんであるが、たとえばこの『堤中納言物語』などのように、素性のよくない本文しか残されておらず、かつ、参照に値する異本が存在しないに等しい作品に関しては、逆に、この大原則を金科玉条として注釈作業に臨んでみたところで、そこにおのずから限界があるのもまた当然なのである。この物語が、その注釈書の数の多さにもかかわらず、いまだに釈然としない部分を多く抱えたままであるのも、本文批判に對して積極的な踏み込みに欠けるものが少なかつたことに一因があるように感じられる。その意味では、結果はともかく『全註解』の見せた姿勢はむしろ評価されるべきであると思うし、今後『堤中納言物語』の注釈を進展させてゆくためには、難解もしくは不可解な箇所の内うちについて、まずは、それぞれの発想に基づく果敢な試案の提出が望まれ、さらに、それらを比較検討した上で十分納得できる見解が認められた場合にはこれを採り―むろん、旧説の正しさがあらためて確認されるケースもあろうが―、そうして残された解釈上の問題を可能な限り解消してゆくほかに道はないのではなからうか。

注

(1) 今回参照した『堤中納言物語』の注釈書および稿中での略称は次のとおりである。清水泰『増訂堤中納言物語評釈』(昭九、立命館出版社) ↓ 『評釈』 佐伯梅友『新註国文学叢書・堤中納言物語』(昭二四) 講談

- 社) ↓ 『新註』、松村誠一『日本古典全書・堤中納言物語』(昭二六、朝日新聞社) ↓ 『全書』、清水泰『堤中納言物語詳解』(昭一九、要書房) ↓ 『詳解』、寺本直彦『日本古典文学大系・堤中納言物語』(昭三三、岩波書店) ↓ 『大系』、山岸徳平『堤中納言物語全註解』(昭三七、有精堂) ↓ 『全註解』、松尾聡『堤中納言物語全註』(昭四六、笠間書房) ↓ 『全釈』、稲賀敏二『日本古典文学全集・堤中納言物語』(昭四七、小学館) ↓ 『全集』、土岐武治『堤中納言物語の注釈的研究』(昭五一、風間書房) ↓ 『注釈の研究』、池田利夫『旺文社文庫・現代語訳対照堤中納言物語』(昭五四、旺文社) ↓ 『対照』、三角洋一『講談社学術文庫・堤中納言物語全訳注』(昭五六、講談社) ↓ 『全訳注』、塚原鉄雄『新潮日本古典集成・堤中納言物語』(昭五八、新潮社) ↓ 『集成』、稲賀敏二『完訳日本古典文学大系・堤中納言物語』(昭六二、小学館) ↓ 『完訳』、大槻修『新日本古典文学大系・堤中納言物語』(平四、岩波書店) ↓ 『新大系』
- (2) 『堤中納言物語』の本文は、高松宮家蔵本(池田利夫解説、複製日本古典文学館)、広島大学蔵浅野家旧蔵本(塚原鉄雄解説、武蔵野書院)、宮内庁書院部蔵桂宮旧蔵本(池田利夫解説、笠間書院)、穂久邇文庫蔵久邇宮旧蔵本(久曾神昇解説、汲古書院)、吉田幸一氏蔵平瀬家旧蔵本(吉田幸一解説、古典文庫)、三手文庫蔵本(塚原鉄雄・神尾暢子校注、新典社)の諸本に適宜依拠し、問題箇所以外は私意により適当と思われる形態で引用したほか、論眼となる傍線部分についても仮名づかいを正した箇所がある。なお、頁・行数の表示は、とりあえず新典社のもを掲げた。
- (3) 高松宮本・広島大学本・宮内庁書院部本・穂久邇文庫本・平瀬本・三手文庫本とも、「」の字母は「古」。
- (4) 本稿での各種文献の引用は以下の書物に拠っており、また、巻数・頁数等の表示もこれにしたがった(ただし、漢字・仮名づかい等の表記については私に適宜改めた)。『うつつは物語』(古典文庫)、『源氏物語』(日本古典文学全集)、『夜の寝覚』(日本古典文学大系)、『蜻蛉日記』(とりかへばや物語)(新日本古典文学大系)、『有明の別れ』、『岩清水物語』

『岩の衣』(兵部卿物語)『八重葎』(恋路ゆかしき大将)(市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成』)、『我身にたどる姫君』(今井源衛・春秋会『我身にたどる姫君』)、『徒然草』(新潮日本古典集成)、『寂蓮法師集』、『正治初度百首』、『宝治百首』(新編国歌大観)。

- (5) 原本の表記は、高松宮本・広島大学本・宮内庁書院部本・穂久邇文庫本・平瀬本・三手文庫本とも「給にしも」。
- (6) 原本の表記は、高松宮本・広島大学本・穂久邇文庫本・平瀬本・三手文庫本「な礼は」、宮内庁書院部本「な連は」。
- (7) 原本の表記は、高松宮本・広島大学本・宮内庁書院部本・穂久邇文庫本・平瀬本「故もなく」、三手文庫本「ゆへもなく」。
- (8) 原本の字母は、高松宮本・広島大学本・宮内庁書院部本・穂久邇文庫本「越」、平瀬本・三手文庫本「速」。
- (9) 新大系本同頁脚注一九、鈴木弘道『とりかへばや物語 本文と校異』(昭五三、大学堂書店) 三三八頁、田中新一・田中喜美春・森下純昭『新釈とりかへばや』(昭六二、風間書房) 三三二頁校異欄参照。
- (10) この部分の原本の表記は、高松宮本・広島大学本・宮内庁書院部本・穂久邇文庫本・平瀬本・三手文庫本とも「おほ世良礼ん」。